

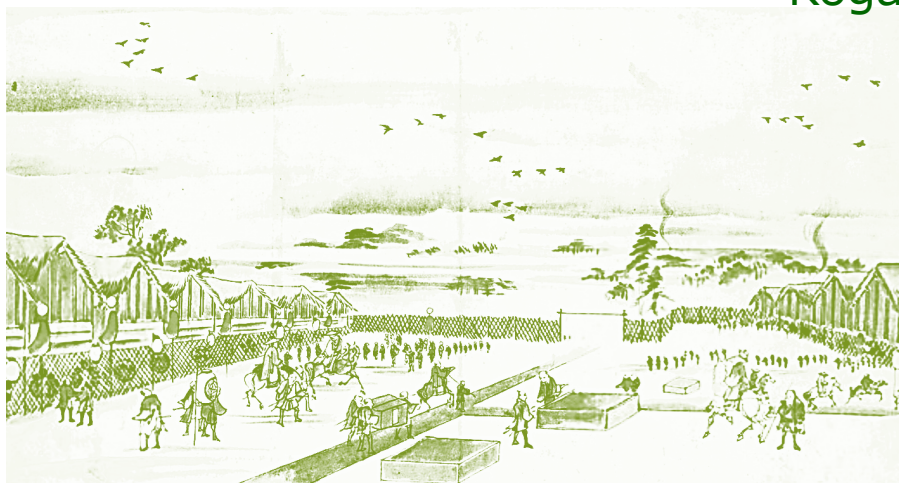


session 4

UNIVERSITY OF CAMBRIDGE DIGITAL LIBRARY

絵巻物『小金原御猪狩之図』を読む

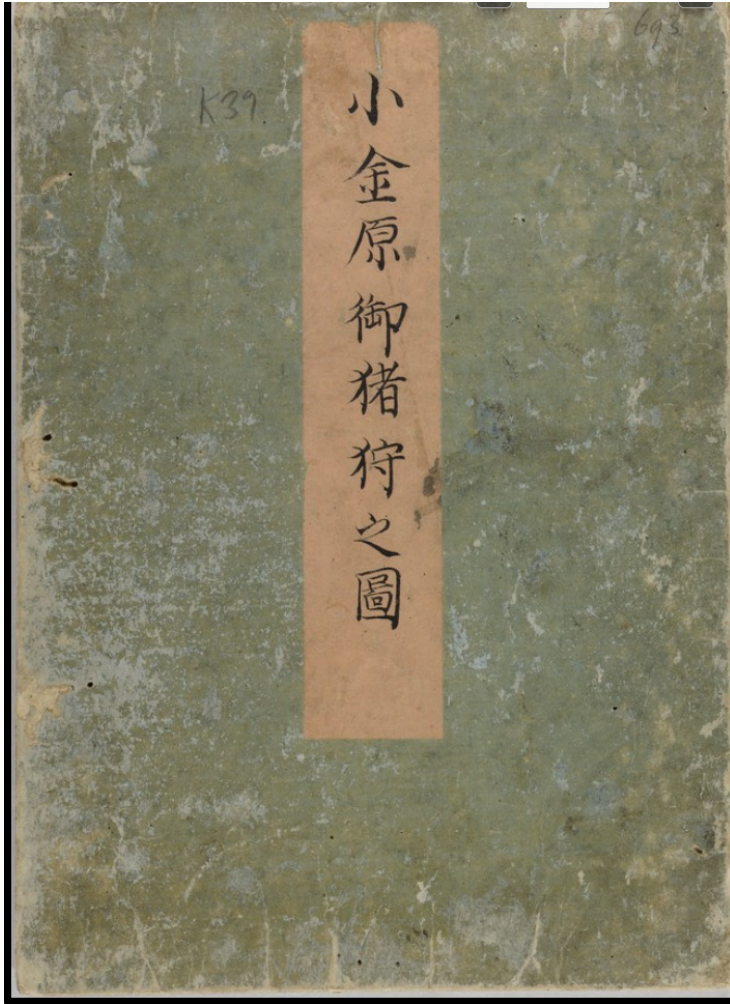
Koganegahara Oshishigarino Zu



<https://cudl.lib.cam.ac.uk/view/MS-FJ-00980-00009/1>

NIJL/EAJRS
Kuzushi-ji
WORKSHOP





小金原御鹿狩

小金原御鹿狩（こがねはらおししかり）は、江戸時代に徳川将軍が現在の千葉県松戸市の小金牧の中野牧を中心として、鹿・猪等を狩った大規模な狩である。

鹿狩と言っても、獲物には猪等、鹿以外の動物も多数含まれている。**狩には将軍の娯楽だけではなく、軍事演習と将軍の示威、農作物に害をおよぼし小金牧の馬と餌が競合する草食動物、馬を襲う野犬の駆除等の目的もあった。**

小金牧は江戸の西に比べ平坦で、江戸に近く、農耕地に囲まれながら農耕地でない小金牧は、大規模な鹿狩の場所として適していた。狩場では御立場を拠点として狩を行った。御立場は高5丈（約15m）、方180間（約320m）の台状に土を盛った山で、将軍の居場所にふさわしい調度品があった。

家齊

寛政7年3月5日。子の刻に出て、両国橋から舟 - 水戸橋から馬 - 卯の刻半に松戸で休息 - 辰の刻半に狩場に着いた。**名前があるのは、将軍の側近だけであり、鹿・猪を獲るのは一種の特権であったことが示唆される。**

国立公文書館に『大狩盛典』としてまとめられた多数の資料があり、御立場の東の高柳から、かがり火を焚いて獲物を追い立てる夜景を描いた、1811（文化8）年、早稲田大学図書館蔵『総州小金原御鹿狩図』、1854（嘉永7）年『小金原田菟之図』、御立場までの御成道を詳細に描いた千葉県立図書館蔵『小金原御鹿狩之記図会（写）』、御立場付近を描いた筑波大学附属図書館蔵『小金御鹿狩町間付画図』ほか多数の記録がある。

《課題》

FJ.480.9

寛政七年のやうに生る

大樹家齊公も総國小倉原に生るる

事有る前の如くして吉田侍従候也

松平^{本姓}信明胡臣と初め部少輔并伊豆朗

おまゝ立苑種周遠河加細久周英濃守

平岡頼長ハ沖先ト参るをもと扱沙佐丹は

折津も堀田も敦肥藩林忠篤也右佐丹

ききり遠なる沙道りれいとして子れ時斗に

沖佐佐橋へまゝ大寺の山橋を 出津有る町の

通ぬ國の河向をせ移しく沙舟に下るは

よハ向升来盤成初形なりきり大川の

うちいゆをききりして水戸橋をききり

松平の河舟は舟橋を惣て是れ渡りて水戸橋を

水戸の河舟は舟橋を惣て是れ渡りて水戸橋を

河舟は舟橋を惣て是れ渡りて水戸橋を

國史館
蔵書
馬場之庫

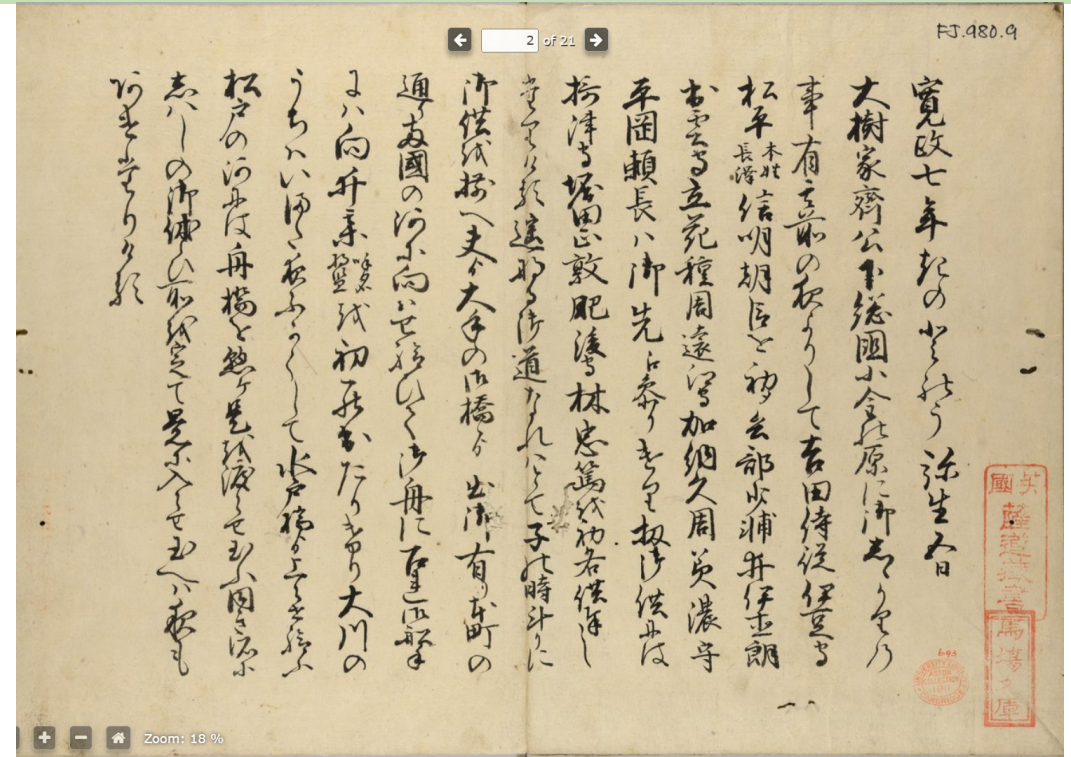
693
UNIVERSITY OF
ASTORIA
COLLECTION
1911

Zoom: 18 %



【翻刻】

寛政七年きのとのう弥生五日
 小金原御猪狩之図
 寛政七年きのとのう弥生五日
 大樹家齋公、下総国小金の原に御し、かりの
 事有、其前の夜よりして吉田侍従伊豆守
 松平〈本姓長澤〉信明朝臣を初メ兵部少輔井伊直朗
 出雲守立花種周、遠江守加納久周、美濃守
 平岡頼長は御先^江参りけり、扨御供には
 摂津守堀田正敦、肥後守林忠篤を初、各供奉し
 たりける、遙なる御道なればとて子の時斗りに
 御供を揃へ、夫々大手の御橋を出御有り、本町の
 通り両国の河に向はせ給ひて御舟に召れ御舩手には
 向井某〈呼名将監〉を初^罷出たりけり、大川の
 うちはいまだ夜ふかくして水戸橋を上らせ給ふ
 松戸の河には舟橋を懸ケ、是を渡らせ玉ふ同き^所に
 しばしの御休らひ所を定て是に入らせ玉へば夜も
 あけたりける







5 of 21 →

小令の津持場ふりて移りて河
津場りきりとも
上院りて中津之場なり已
り初る頃なりとて入る
金吾兼定邸戸部卿敷邸より
津より好いりて中津あり
河方より津より河より入る

《課題》



【翻刻】

小金の御狩場にいらせ給ひてまづ
御場のさまをも
上覧ありて、中の御立場には已
の刻過る頃いらせ給ふ、**兼て**
金吾斎匡卿、戸部斎敦卿にも
御ともなひありて、此御両卿の
御方々も御先へまからせ給ふ

5 of 21



小金の御狩場にいらせ給ひてまづ
御場のさまをも
上覧ありて、中の御立場には已
の刻過る頃いらせ給ふ、**兼て**
金吾斎匡卿、戸部斎敦卿にも
御ともなひありて、此御両卿の
御方々も御先へまからせ給ふ





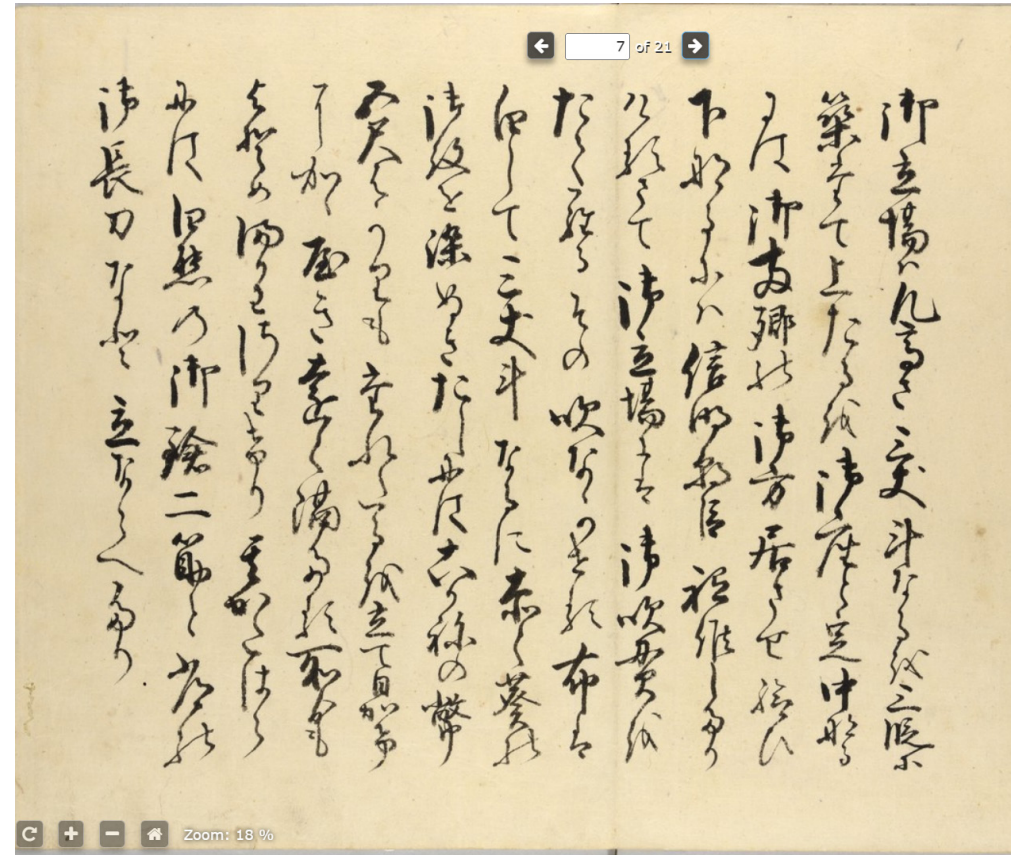
7 of 21

NIJL/EAJRS
Kuzushi
WORKSHOP



【翻刻】

御立場は凡高さ三丈斗なるを、三段に
築たて上たるを御座と定、中なる
には御両卿の御方居させ給ひ、
下なるには信明朝臣祇候したり
ける、さて御立場には御吹貫を
たてらる、その吹ながせる布は
白して三丈斗なるに、赤く葵の
御紋を染ぬき、だしにはこがねの幣
五尺ばかりもたれたるを立て日かげ
にかゞやき遠く隔たる所をも
よそめまがわざりけり、其かたはら
には白熊の御鎗二筋と常の
御長刀など立ならべたり







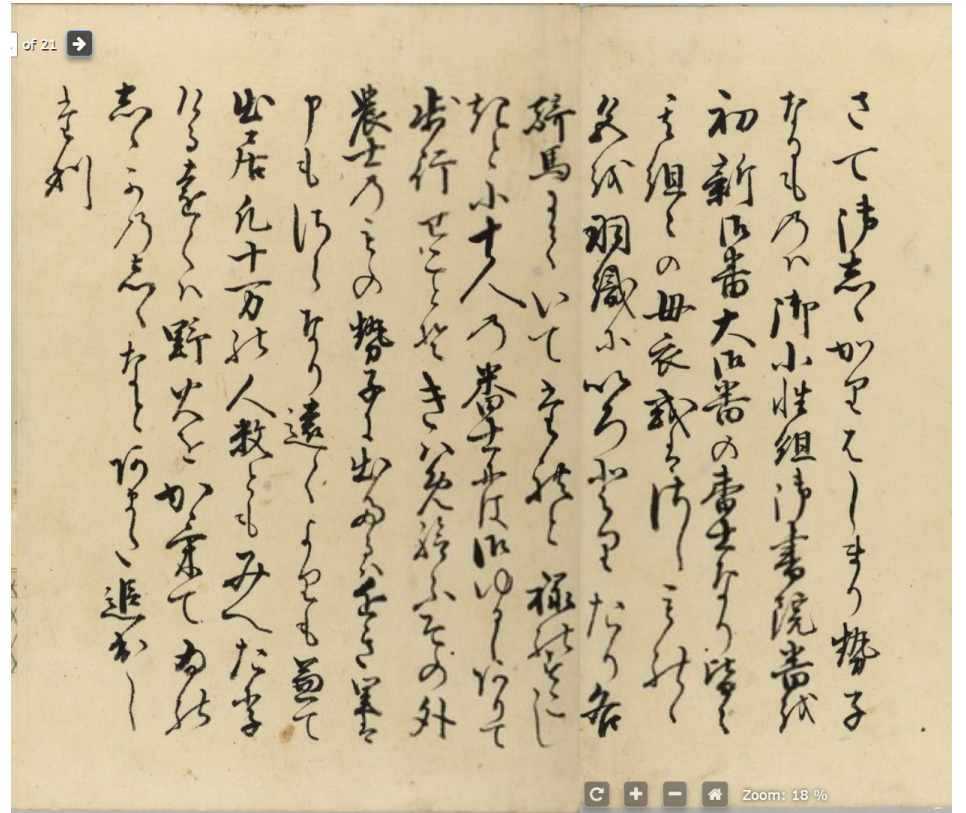
《課題》

さて清志がやるといふ摺子
なりもの御小姓組清志院書紙
初新田番大田書の上まへに
之組の母衣或はけり
久保羽織ふけりやうとだる各
騎馬といてきり極むに
却て小十人へ参りてはけり
歩行せしやきい久保ふけり外
農士のまの摺子出ぬまを
尸もけり遠くうまも
出居凡十万人教もみくた
るをの野火をかきて
あつたうたうたうと
を利



【翻刻】

さて御しゝかりはじまり勢子
なるものは御小姓組御書院番を
初新御番大御番の番士なり皆々
其組々の母衣或はさしものゝ
色を羽織にいろどりたり各
騎馬にていでたれど禄のすこし
きと小十人の番士には御ゆるしありて
歩行せことぞきはめ給ふその外
農士のもの勢士に出たるは近き里は
申もさらなり遠くよりも兼て
出居凡十万の人数ともみへたりけるを
遠くは野火をかけてゐの
しゝかのしゝなどあまた追出し
たり





《課題》

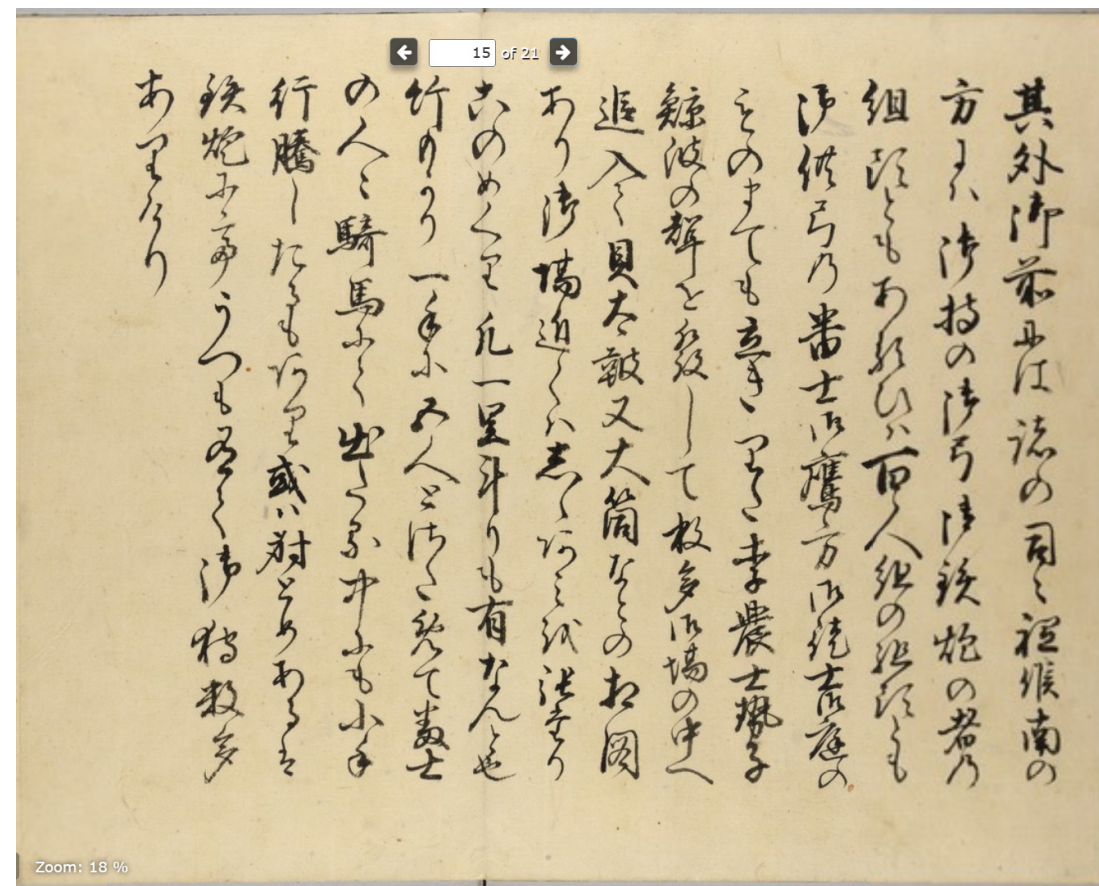
其外津前江流の同じに津南の方へ津持の津より鉄炮の音の組頭もあけいり百人組の組頭も津供らり番士も鷹方も銃吉原のそのまてもあき、いり、幸農士堀子鯨波の輝とあてて数多の場の中へ進み貝を敵又大筒をそのお国あり津持進みいりあてり紙張りあめくさる一里外りも有なん也竹りり一ふみ人といひてあて番士の騎馬あて出さる中ふも小行騰したるもあてり或村よりあてり鉄炮あてりいりもあてり津持数多ありあり

Zoom: 18 %



【翻刻】

其外御前には諸の司々祇候南の
 方には御持の御弓御鉄砲の者の
 組頭どもあるひは百人組の組頭ども
 御供弓の番士御鷹方御徒士御庭の
 ものまでも立きりたり農士勢子
 鯨波の聲を~~発~~して数多御場の中へ
 追入て貝太鼓又大筒などの相図
 あり御場近くはしゝあみを張たり
 このめぐり凡一里斗りも有なんと也
 竹もがり一手に五人とさだめて番士
 の人々騎馬にて出たる中にも小手行騰
 したるもあり或は射とめあるは
 鉄砲にてうつも有て御狩数多
 ありけり

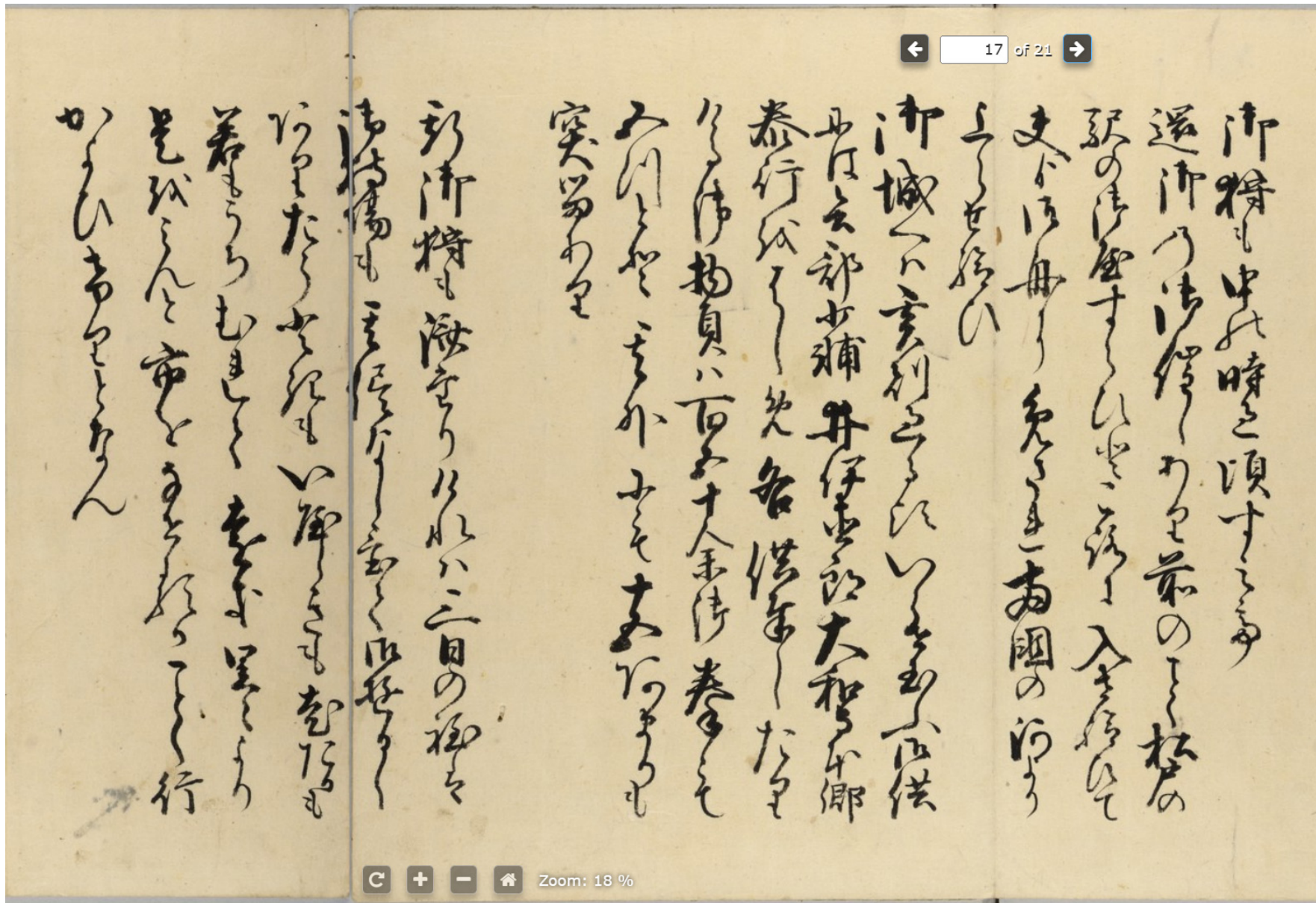


伺候・祇候（しーこう）
 行騰（むか-ばき）

貴人のそば近くに仕えること



《課題》

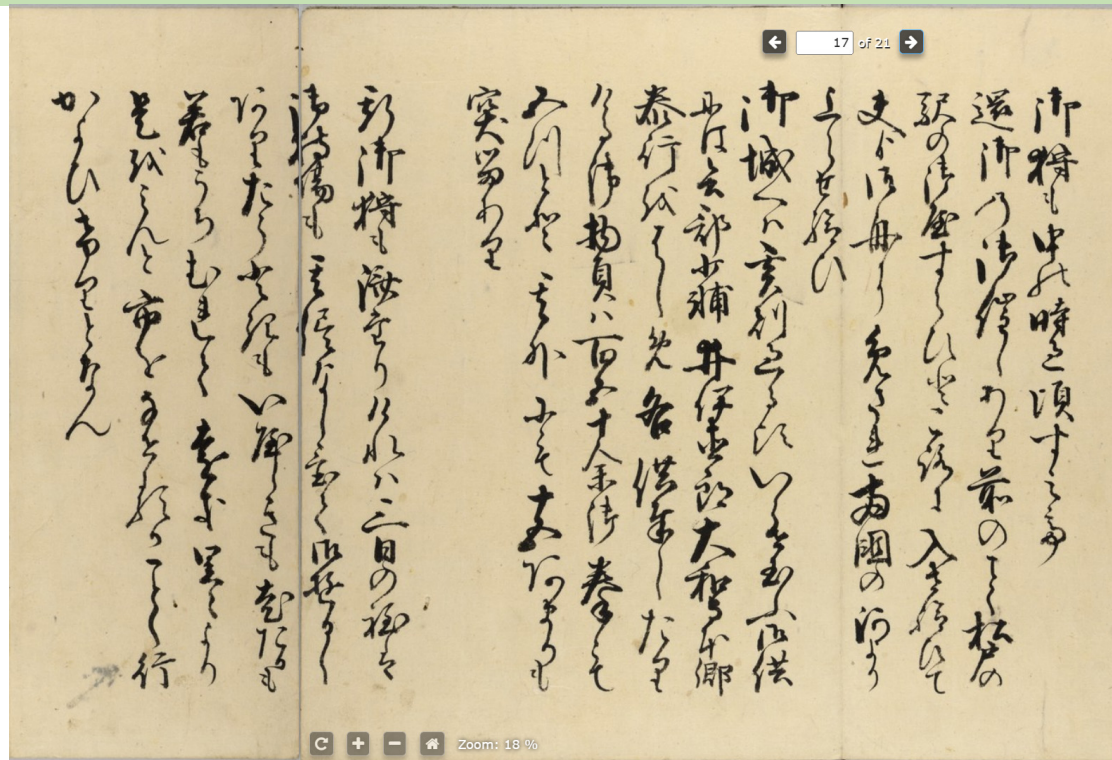




【翻刻】

斯御狩も済たりければ三日の程は
御狩場も其俣なし置いて御ゆるし
ありたうときもいやしきも老たるも
若もうちむれて遠き里々より
是をみんと市をなせるがごとく行
かよひけりとなん

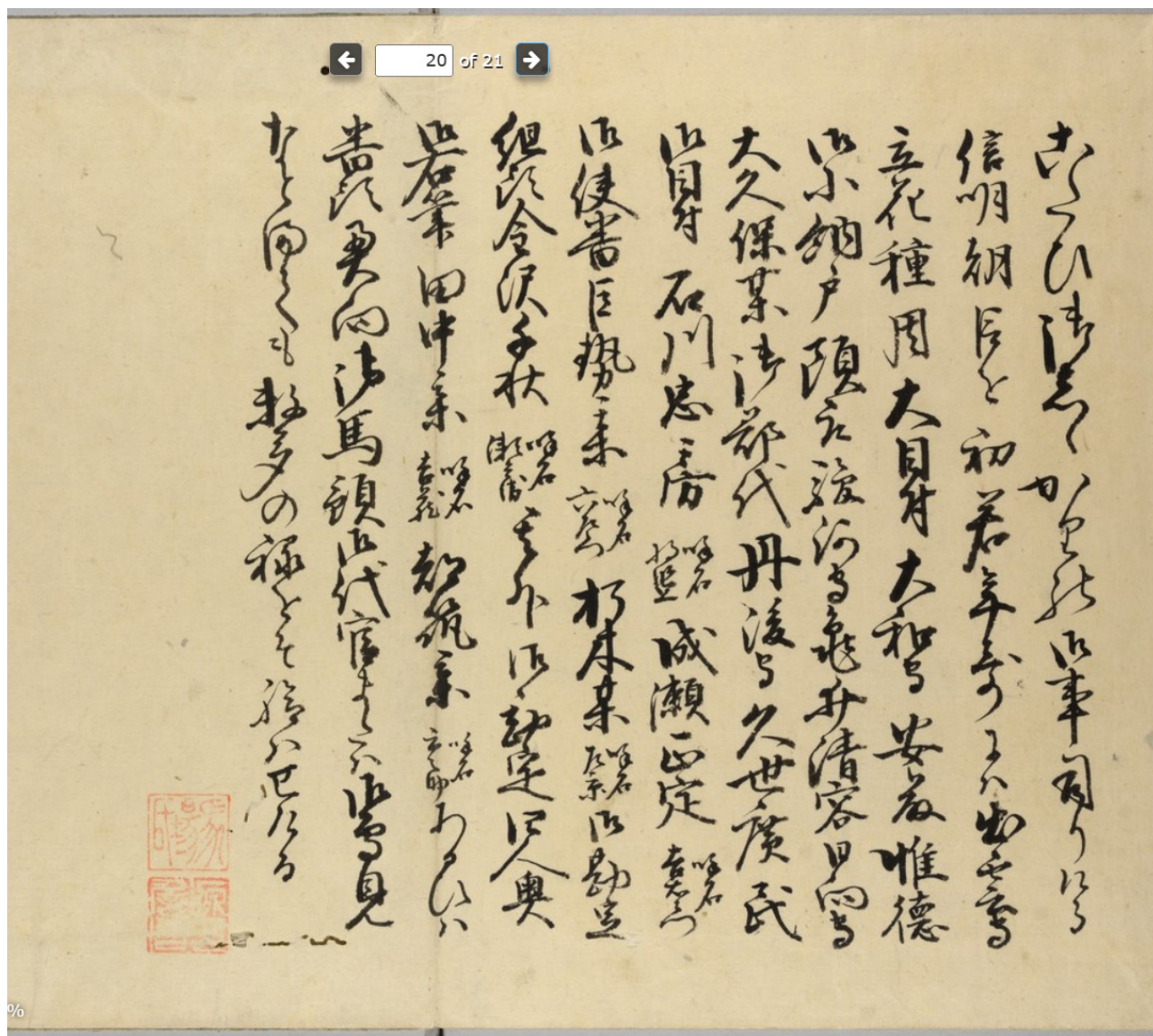
御狩も中の時過頃すみて
還御の御催しあり前のごとく松戸の
駅の御やすらひとところに入せ給ひて
夫々御舟にめされ両国の河より
上らせ給ひ
御城へは亥刻過る頃いらせ玉ふ御供
には兵部少輔井伊直郎大和守本郷
泰行をはじめ各供奉したり
ける御物員は百五十余御拳も
五つとぞ其外にも十五あまりも
突留あり







《課題》



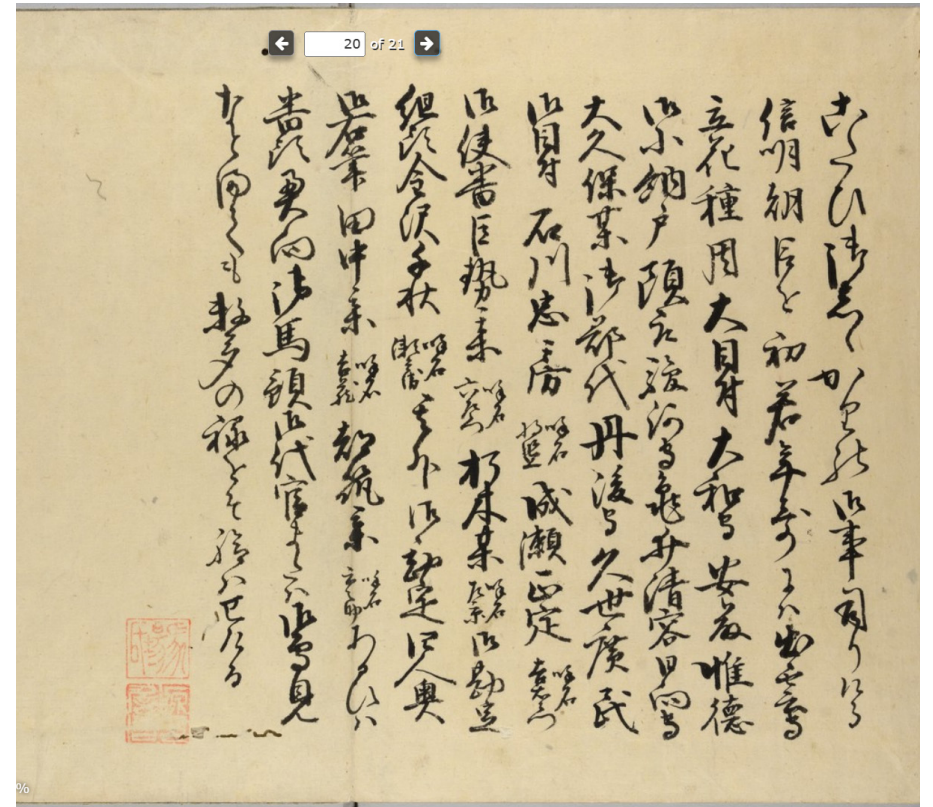


【翻刻】

こたひ御しゝかりの御事司りける
信明朝臣を初若年寄には出雲守
立花種周大目付大和守安藤惟徳
御小納戸頭取駿河守亀井清容日向守
大久保某御郡代丹後守久世広民
御目付石川忠房〈呼名将堅〉成瀬正定〈呼名吉右衛門〉
御使番巨勢某〈呼名六左衛門〉朽木某〈呼名左京〉御勘定
組頭金沢千秋〈呼名瀬兵衛〉其外御勘定四人奥
御右筆田中某〈呼名吉蔵〉都筑某〈呼名云之助〉あるひは
番頭奥向御馬預御代官または御鳥見
などまでも数多の禄をぞ給はせける

〔馬場氏〕

〔原信之印〕





大陽長植

右振舞大令俊修之三男重政にて條函下りしを以て
文政三年三月 志賀理麻

志賢理齋

嘉永二己酉のち 江戸十八日

大樹家慶公小金の原持沖持が以て利盛愛
より寛政五年沖持が袖物信より未老し
乃沖持も其沖持の習を皆よりなりぬる
女画史文雪なりて字一夢うせふ草と
山川和成とぬ

山河成此

奥書とは文字通りにいえば、本の奥に本文とは別に書き加えられた書き付け、文章ということであるが、書誌学上の用語としては、典籍の書写年代、筆者、書写の目的、あるいは伝来・修理などその典籍の写本・版本としての成立の事情、今日まで伝わったさまざまな歴史を明らかにしてくれる記文を総称して奥書と呼んでいる。





【翻刻】

此一巻は兼て養川院法印惟信が筆のうつして
予持ゐたりけるを、梶野規満のぬしの望
にまかせかしたりければ丸山故辰にうつさせ
給ふ。かくて其絵の間々にそのことはりを
あからさまにしるし侍りければ規満のぬしも
兼て其事を聞書し侍りけるとあはせて
ことばにつらねよとの需によりてかくは
書つらねたり

大塚長桓

右梶埜大人より借得て三男重政をして臨画せし
むる者也

文政二卯年三月

志賀理斎

嘉永二己酉のとし弥生十八日

大樹家慶公、小金の原の御狩有し頃出洲盛愛
より寛政なる御狩の軸物借得給ふこたひ
の御狩も此御例に習はせ給ふよしなれば
女画史文雪をして写しゑかゝせ給ふ筆は

山川和成とりぬ

狩野 惟信（かのう これのぶ、宝暦
3年10月15日（1753年11月9日）
- 文化5年1月9日（1808年2月5
日）は江戸時代の木挽町（こびき
ちょう）家狩野派7代目の絵師であ
る。父は狩野典信で、子に狩野栄
信がおり、鋏形蕙斎が弟子だった
時期がある。号は養川（法眼時
代）、養川院（法印時代）、玄之
斎。号と合わせて養川院惟信と表
記されることも多い。



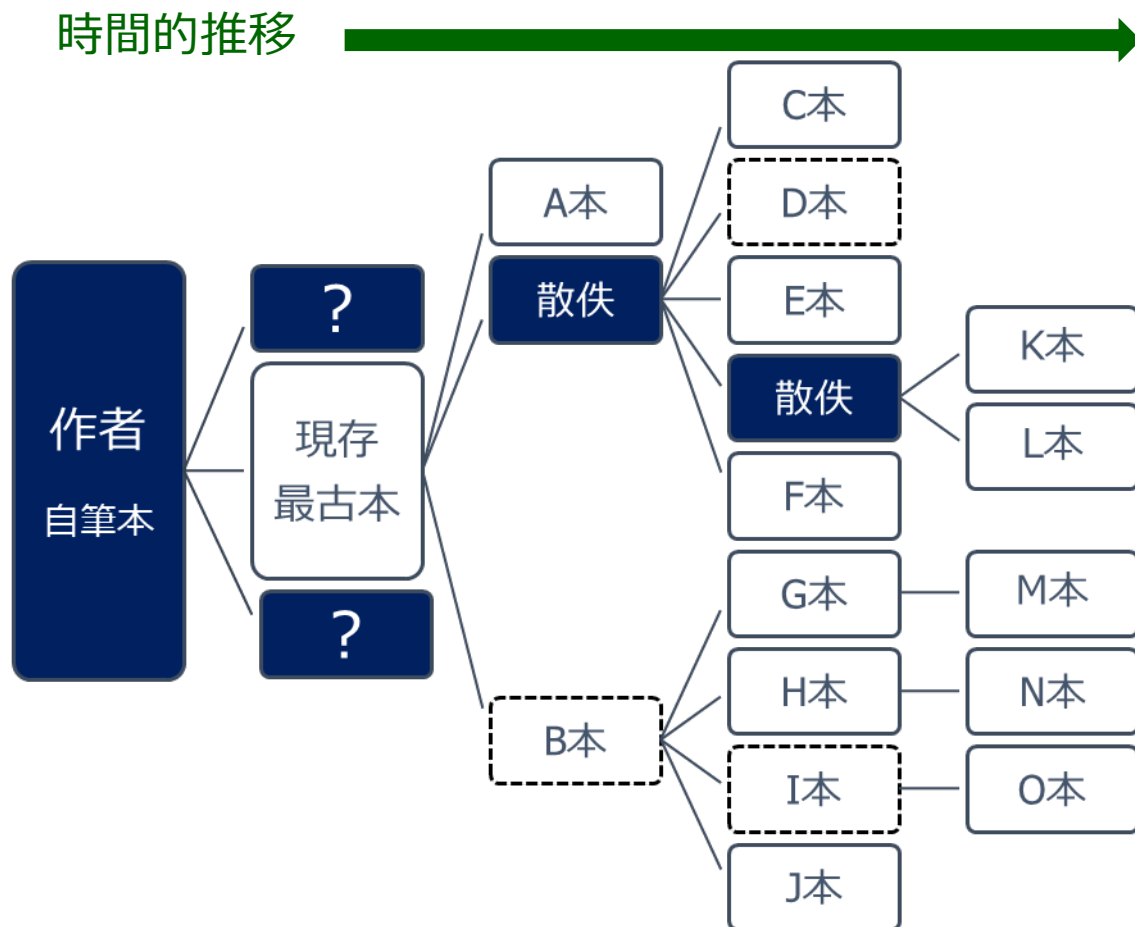
船橋本



ケンブリッジ本



書かれたモノは一定ではない



※**写すたびに異本が派生**（目移、誤写）

※完本残存とは限らない

※**意味を考えず書写多**（可読性を無視）

※時代の推定

※料紙・顔料の分析

※欠落を埋める **時には贋作も**

※鑑定の意味（**極め札・箱書**）

モノの保証ではない

※稀書複製会物・コロタイプ印刷物



それではこのセッションを終わりにします